2005年2月発行
文団連会報
設立5周年記念特集号より

文化を発信する狭山へ

さねとう あきら

平成12年、発足して間もない文団連が催す第一回狭山市民芸術祭のために、オリジナル脚本を書き下ろし、演出の仕事を引き受けることになりました。（中略）

脚本執筆のために取材に歩いてみますと、それまで知らずにきた多くの史実・伝承に巡り合い、この地に沈殿した歴史的価値の高い豊かな文化性に、目のウロコが落ちる思いがしました。

古くから、武蔵の国と上野の国を結ぶ官路＝伊利麻路(いりまじ)が貫き、後には坂東武者が疾走した鎌倉街道となり、狭山一帯は歴史の街道にまつわる、さまざまなドラマを展開させてきました。更には、この地に伝わる獅子舞や、笹井の足踊りなど、風土色豊かな郷土芸能の数々も、色どりをそえてくれます。

翌平成13年2月、第一回狭山市民芸術祭で上演した『狭山いまむかし』は、太古から現在に至る郷土狭山の歴史的営みを、文団連に結集した諸団体が一丸となって歌い上げる、一大ページェントになりました。狭山の地に対する尽きせぬ愛郷心とともに、文団連傘下の各団体が育んだ芳醇な表現力を内外に示す、またとないチャンスになりました。　（中略）

『地方の時代』といわれる今日、文化を受容・消費するだけでなく、発信する方向へ自信を持って進むべきだろうと、強く思いました。それを支えるだけの豊かな遺産を、先人たちは、この地に残しているのです。

2010年2月開催
第10回 狭山市民芸術祭
プログラムより

今こそ語れ、狭山の民話

さねとう あきら

わたしはかねがね、狭山という土地柄・人情を映した「代表的民話」のないことを、残念におもっていました。断片的には面白い伝承・民話は残っているのですが、それらを結集してひとつの小宇宙を物語るところまで、煮詰まっていなかったわけです。

長年、各地の伝承を拾い上げ、それらを「創作民話」に仕上げてきたので、「無ければ作ればいいじゃないか」が、わたしの主義でした。今回、第10回市民芸術祭の脚本を依頼されたのを幸いに、一つ「狭山の民話」、「狭山の小宇宙」に肉薄してみようと考えました。

もちろん「創作民話」だからといって、でたらめに作っていいものではありません。狭山市長の仲川さん*、博物館長の高橋さん*にも有益なお話をうかがうことが出来ました。入曽にくわしい広沢さん、笹井の語り部 今坂さんから、その土地ならではの貴重なお話しを聞かせてもらいました。

そうした人々に加えて、文団連の方々の熱心なサポートもあって、『さやま民話風土記』は出来上がったわけですが、もとよりこれはほんの序章に過ぎません。お話しの一つ一つが、狭山市民の心をとらえ、語り継がれてこそ、「狭山の民話」の資格を得たといえるでしょう。これらの民話が、百年後も土着の話として生き残っていたら、これに勝る喜びはありません。

（* 編註：役職はいずれも2010年当時）

第10回 狭山市民芸術祭
文団連設立10周年記念特別公演 **『さやま民話風土記』**
プロローグとエピローグのある９景

脚本・構成・演出　さねとう あきら（多数の劇中歌作詞含む）

プロローグ「昔ばなし讃歌」　１景 狐獅子舞　２景 ごしん山の化け汽車
３景 とおかんやの月　４景 かまどの神さん縁結び　５景 なぜなぜ子守唄
６景 地蔵の年越し　７景 狭山春景色　８景 入間馬車鉄絵巻
９景 二つの太陽とダイダラボッチ　10景 天国手まり歌　11景 狭山七夕縁起
エピローグ「春の神話」